

あらためて考える 子どもの貧困

松本伊智朗 北海道大学教育学研究院

1 はじめに

(1) なぜ「あらためて考える」のか

「子どもの貧困」に対する関心の高まり、政策的課題としての認識
ひとつの危惧、杞憂？

問題の理解が深まり対策の幅が広がるのか、問題が分断され対策が矮小化するのか

(2) 松本の経験と「なりゆき」

貧困研究との出会い／貧困に関心を持たない社会／児童養護施設での「学習支援」／
児童養護で育つ子どもの卒園後の生活／障害児の放課後の生活と「子どもの世界」／
子ども虐待問題と「子どもの経験・声」／イギリスの児童保護と専門職・機関連携／
DV問題とジェンダー・家族／自立援助ホームの運営／子どもの貧困という観点

2 歴史的経過

(1) 貧困

1) 論争的な概念

社会と個人・家族 / 容認できない不平等と価値 / 測定基準と単位
時間 / 個人の経験と感情 / ケイパビリティ / 政策

2) さしあたりの定義

「必要」を充足する資源の欠如、不足

「必要」の定義 「生存」：絶対的貧困 「社会生活・社会参加」：相対的貧困

(2) 貧困の再発見と子ども

1) 1960年代のイギリスにおける「貧困の再発見」

福祉国家は貧困を解消したのかどうか

公的扶助以下の貧困世帯の存在

稼働・子持ち世帯の貧困 → 貧困下で暮らす子どもの存在

労働党政権と家族手当の問題 CPAG の結成

2) 日本における「貧困の再発見」？

1965年 低消費水準世帯の推計の取りやめ

1990年代後半 格差への関心 / ホームレス問題の政策課題化

医療保険制度、生活保護制度の「後退」？

子どもの貧困への関心の高まり 子どもの貧困対策法の成立

3 あらためて考えてみたいこと

(1) 問題にすべきは「貧困」か「子どもの貧困」か

〇〇の貧困 貧困の種類？ ⇔ 社会的区分と貧困の表れかた？

反貧困政策・実践の領域

(2) 「本当の貧困」さがしの罫

問題の分断と市民の分断 / なんのために貧困という用語を使用するか

(3) 家族に依存している社会

「標準家族」？ / 費用調達とケアの家族依存 / ジェンダー平等の観点

(4) 貧困の世代的再生産という用語・現象

個人主義的理解との親和性

社会的過程として把握 / 連鎖???

(5) 「子どもに責任はない」という言説

責任とは何か 責任の多義性 個人と社会に区分しうるか

(6) 「未来への投資」という観点

社会の安定と持続性という観点

子どもの「いま」と将来 / 障害をもつ子ども / 子どもの年齢

(7) 教育・学校の可能性

4 おわりに

文献（松本稿）

「子どもの貧困研究の視角 - 貧困の再発見と子ども」

浅井・松本・湯澤編著「子どもの貧困」明石書店 2008年

「教育は子どもの貧困対策の切り札か？」 『貧困研究』第11号 明石書店 2013年

「子ども・若者の貧困」 日本社会福祉学会編『社会福祉事典』 丸善 2014年